



〈中国学 わたしの一冊〉 馮夢龍『山歌』

大木, 康

(Citation)

未名, 43:31-62

(Issue Date)

2025-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100504955>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504955>



〈中国学 わたしの一冊〉

馮夢龍『山歌』

大 木 康

はじめに

神戸大学の早川太基先生から、『未名』誌「中国学 わたしの一冊」への寄稿依頼を受けた。なんでわたしが、とおたずねしたところ、これまで日本中国学会の理事長をつとめられた方にお願ひしているとのこと。わたしの場合、拙稿を載せていただくには価しないことは重々自覚しているのであるが、そういう次第であれば、お断りするわけにもゆくまいと執筆をお引き受けすることにした。

わたしにとっての一冊、一つの書物を時間をかけて読み込み、その結果を全体の訳注を含めて世に問うたものとしては、馮夢龍の『山歌』と冒襄の『影梅庵憶語』の二点がある。ここではそのうち、大学院時代に研究に着手し、『馮夢龍『山歌』の研究 中国明代の通俗歌謡』（勁草書房 二〇〇三年）の著書として刊行するまで二十年近くにわたって仕事をした『山歌』をめぐる書かせていただくことにしたい。後者については、『冒襄と『影梅庵憶語』の研究』（汲古書院 二〇一〇年）がある。

そもそも中国学の道に志した背景や馮夢龍という研究対象にめぐりあった次第については、これまでもインタビュの記事や、自分でも書いたことがあるので（『明清文学論集』編集委員会編『明清文学論集』東方書店 二〇

二四年の「あとがき」ほか）略に従いたいが、要は短篇白話小説集「三言」の一つ『醒世恒言』に収められた「売油郎独占花魁」の物語を読んで心ひかれ、「三言」を編んだ馮夢龍その人に関心を持ったことにはじまる（最初に読んだのは「三言二拍」からの選集である『今古奇観』に収められたそれであったが）。

一時代には一時代を代表する文学ジャンルがあるとの考え方にもとづくならば、「漢文・唐詩・宋詞・元曲」の後を承けて、明清両代は白話小説の時代といえることができるであろう。明代では『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』の「四大奇書」をはじめ、「三言二拍」などの短篇白話小説、清代では『儒林外史』『紅樓夢』などの巨編大作が生み出されたのがこの時代だからである。ちなみに多々ある小説作品の中から『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』の四作を取り上げて「四大奇書」と称したのも馮夢龍にはじまるようである（李漁『三国志演義序』に見える）。

こうした白話小説作品は、明代の後半期、とりわけ明末の時代に突然のように多くの作品がそろって世にあらわれる。中国文学史の上での明末の問題は、この時代に多くの白話小説があらわれたのは、いったいなぜかという点に帰するであろう。そして、小説ばかりでなく、戯曲や歌謡など、広く通俗文学が盛んだったのがこの時代である。この問題を考えるにあたっては、明末の時期に通俗小説をはじめとする通俗文学に関わったのが、どのような人たちであったのかをさぐる一つの手がかりとなるであろう。ところが、『三国志演義』にしても『水滸伝』にしても、その作者は具体的にはわからない（作者といっても、ここでは、もともと寄席の講談として口頭で行われてきた物語を文字に書き記し、いま普通にみんなが読んでいる百回、百二十回の長さのテキストをまとめた人のこと）。『金瓶梅』は、あきらかに『水滸伝』を読んだある人物が、『水滸伝』ではすぐに殺されて、いなくなってしまう西門慶が、もし命長らえていたらという仮定の下で書き下ろした個人創作作品ではあるのだが、これも蘭陵笑

笑生のペンネームがわかるだけで、それがいったい誰であったのかは、多くの研究者がさまざまな説を提出してきたものの、いまだ決定的な定論となるには至っていない。

そんな状況の中で、通俗文学に深く関与した人物で、その伝記が比較的詳しくわかるのが馮夢龍なのである。馮夢龍について調べていけば、なぜ明末に通俗文学が盛んになったのかを知る手がかりが得られるかもしれない。これが、そもそも馮夢龍に的を定めた問題意識である（もちろん、これは一種の後知恵であって、つまりは馮夢龍の作品がおもしろかった、性に合っていたというのが本音である）。かくして、学部卒業論文は「馮夢龍研究序説」、修士論文「馮夢龍とその『三言』についての研究」、そして博士論文「馮夢龍『山歌』の研究」と、ずっと馮夢龍とつきあい続けてきた。

馮夢龍は、明の万暦二年（一五七四）に生まれ、清の順治三年（一六四六）に亡くなっている。蘇州の人で、その家は蘇州城の東南隅、葑門のあたりにあった。近年施曉平氏の発見紹介された資料、『康熙十八年博学鴻詞姓氏錄』、馮夢龍の兄馮夢桂の曾孫馮勛の条に見える馮氏代々の履歴によれば、馮家は代々「儒医」としてあったようで、馮夢龍のおじにあたる馮其盛には『幼科輯粹大成』の書があり、馮夢龍の父の馮曙もその編纂出版に関与していた。出版もまた馮家代々の家業だったようである。馮夢龍は科擧の郷試には終生合格することはできなかったものの、晩年貢生になり、その資格で福建寿寧県の知県に任じられている。その著作は、広く經史子集の四部にわたっており、『江南通志』に見えるその伝には、「擧業家の崇する所」とあって、その科擧の参考書がよく売れたことが記されている。

この馮夢龍について、はじめは短篇白話小説集「三言」について調べていたのであるが、やがて馮夢龍が編纂出版した蘇州の民間歌謡集『山歌』にめぐりあい、そちらに関心を抱くことになった。修士論文を書いた後、当時の

東大中哲文学会で何か発表せよとのことで、一九八四年七月一日、シンポジウム「中国の実像への接近」において、「明清の白話小説への一視座―馮夢龍『三言』の位置づけをめぐる」と題して発表をしたことがある。そのとき、馮夢龍『山歌』の序文の一部を引用したところ、その発表をお聞きくださった指導教官の尾上兼英先生が、ひとことポツリと「『山歌』は大事ですよ」とつぶやかれた。これが心にひびいた。やってみよう。

一、版本の章

馮夢龍の『山歌』は、明末の一六〇〇年ごろに刊行されたと思われるが、その後およそ三百年もの間、その存在がほとんど知られずにあつた。『山歌』の最初の排印本を刊行した、上海伝経堂主人朱瑞軒の「後記」によれば、朱瑞軒は一九三四年、安徽歙県の許甄夏が所蔵していた『山歌』を発見し、譲りうけた。一九二〇年代、三〇年代、中国において小説や戯曲など通俗文学作品の本格的研究がはじまるとともに、その発見紹介が引き続いていた。学者たちが、それまで見向きもされなかつた小説戯曲に関心を持ったとなれば、当然その書価は高騰する。そのことが、朱瑞軒のような書店の主人たちによる搜索熱を高めたのである。そして、北京の書商たちは、しばしば山西商人（晋商）のふるさつである山西へ、そして上海の書商は新安商人（徽商）のふるさつである安徽の徽州に足を向けた。万暦版の『金瓶梅詞話』は、『山歌』の数年前、一九三二年に山西の介休県で発見されている。

朱瑞軒は、買い求めた『山歌』を上海に持ち帰ったところ、汪雲蓀が見てはしがり、ついに汪氏に譲ることにした。最初に許甄夏から譲り受けた時、許氏は、この珍しい作品を湮滅させてしまうことは文化の損失であるので、刊行して流伝させたいといった。汪氏もそれと同意見で、本はわたしの所蔵であるが、刊行するとなればいつでも持っていて刊行するように、といった。その一九三四年の冬、兄の朱遂翔から顧頡剛が杭州に来ていることを聞

いた朱瑞軒は、汪氏から本を借り、副本を作つて顧頡剛に贈つた。顧氏はたいへん驚いて刊行を勧め、校点をして序文を書こうといった。蘇州の人である顧頡剛は『古史弁』をはじめとする古代史の研究で知られるが、若いころには北京大学歌謡研究会の一員として、当時の蘇州の歌謡を採集して『吳歌甲集』を編んだりしていた。この間のことは「古史弁自序」に詳しく述べられている（日本語訳が平岡武男訳『ある歴史家の生い立ち 古史弁自序』岩波書店 一九五三年）。

朱瑞軒は最初影印本を作るつもりであつたが、ために最初の二葉を印刷してみたところ、墨が淡く、ぼやけてしまふので、影印本はやめ、再び顧氏と相談して、校訂排印本を出すことにした。そして顧頡剛と朱遂翔から周作人、馬隅卿（馬廉）、錢南揚、婁子匡に考証の文章を依頼し、朱瑞軒みずから鄭振鐸、周越然、汪雲蓀に序文の執筆を依頼した。

一年ほど経つて、この三百年ばかり湮滅していた書物の校訂排印版が世に出ることになった。しかしながら、考証を書くことを快諾した馬廉が、一九三五年二月に突然亡くなつてしまひ、また周越然、婁子匡の序文も、時間の関係から書けずにあつた。一方、いよいよ印刷の段階に至つて、胡適が『山歌』について論じた手紙を顧頡剛から手に入れることができた。この本の封面の裏面には、黒枠の中に「紀念 馬隅卿先生」として、この本が亡くなつた馬廉に捧げられることが記されている。馬廉は北京大学の教授であつたが、戯曲小説などの研究に手を染め、馮夢龍についてもその年譜や著作目録を作つていた。それらは生前発表されることはなかったが、二〇〇六年に出た『馬隅卿小説戯曲論集』（中華書局）によつて見るできるようになった。『山歌』刊行にあたつて、馬廉に文章の依頼が行つたのは、ごく自然であつた。馬廉は、その齋号を「不登大雅之堂」また「平妖堂」といい、戯曲小説を中心とする多くの蔵書で知られる。その旧蔵書は北京大学図書館に収められ、戯曲について『不登大雅文庫藏珍

本戯曲叢刊（学苑出版社 二〇一五年）の影印本も出されている。

この最初の『山歌』排印本について、朱瑞軒が「後記」に記しているところは、おおむね以上のようなことである。朱瑞軒の伝経堂書店は、「後記」の末尾に「一九三五年八月朱瑞軒謹誌于上海蓬萊市場伝経堂」とあるように、上海旧県城内の西南隅、小西門近くの蓬萊国貨市場にあったようである。しかし、一九四一年の『上海人名録』にその名が見え、「福州路三七六号上海書林 經理」とあるから、後に書店街である福州路に移ったのかもしれない。福州路三七六号は、いま外文書店のあるあたりである。「後記」にも見えた朱瑞軒の兄の朱遂翔は紹興の人で、やはり古書の商売に従っていたようである。

この朱瑞軒伝経堂の『上海伝経堂書店第三期旧本廉価書目 二十三年八月』に、なんと『山歌』が掲載されていたのであった。

四 山歌 童痴二弄 四冊 廉価三十元

書凡十卷 馮夢龍著 精写本 極精緻 卷一至卷四為『私情四句』共一百七十六首卷五収『雜咏四句』三十首六卷収『咏物四句』三十首七卷『私情雜体』五十五首八卷『私情長歌』（兼説白）十三首九卷『雜咏長歌』（兼説白）八首十卷『桐城時興歌』二十四首每首均有夢龍評註語多幽默前九卷所収大抵吳歌伝本極稀

ここには「精写本」とあるので、原本ではなく、あるいは顧頡剛に副本を贈ったり、諸家に序文を依頼したりした時、別に作られた写本の一つかもしれない。目録にはこの前に、

一 程瑤田先生手批考工記圖二卷 精裝一箱 有湖田草堂藏印 四冊 廉価八十元

二 稿本程瑤田先生蓮飲集四卷 有湖田草堂藏印 二冊 廉価八十元

とある。程瑤田は歙県の人であり、湖田草堂とあるのも歙県の呉得英のことであるから、おそらく朱瑞軒が『山歌』と同じ時に歙県で入手したものであろう。程瑤田の稿本はたしかに貴重であるが、こちらは八十元。たとえ写しであったにしても、世界に一つしかない『山歌』が三十元というのは、それらと比べてきわめて安い価格ではなからうか。もつとも同じ書目では、九四番、明版の『浣紗記』四冊が十六元とあるから、それらと比較すれば高いのかもしれないが。当時、もしわたしがこの目録を見ていたら、すぐに電報を打って、『山歌』精写本の入手をころみただろうと思う。

『山歌』を最初に購入したのが、やはり安徽歙県の人、汪雲蓀であった。汪雲蓀は蔵書家として知られ、『販書偶記』で知られる北京琉璃廠の孫殿起が一九三九年に汪雲蓀のもとから三百余种の本を入手したという。『山歌』排印本には、「汪雲蓀跋於案牘紛紜之室」と題する汪雲蓀の跋がある。それには「(民国)二十三年の春、苗子(黄苗子か)とたまたま伝経堂で旧書を瀏覽していたところ、ふと墨憨齋の『山歌』十巻を見つけ出した。気に入って手放すことができず、すぐに重価で買い求めた」とある。重価がいくらであったかは残念ながら記されていない。

『山歌』の原本は後に鄭振鐸の手に帰し、現在は北京の国家図書館にある。これを手にいれたことについて、鄭振鐸は『劫中得書記』「童痴二弄山歌」において、自分はどうしてもこの本が欲しかったのだが、「この時、ほしがっている者は数人にとどまらなかった。ほとんど手に入るまいと思ったのだが、手にいれることができ、幸いという

べきである」と、その喜びを語っている。鄭振鐸は、『山歌』排印本が刊行されたのと同じ一九三五年に『中国俗文学史』を刊行しており、その第十章「明代の民歌」で『山歌』から多くを引用している。現在北京の国家図書館に蔵される『山歌』には、鄭振鐸の印のほか、「雲蓀」「平陽旧族」「雲蓀過目」「汪氏所蔵」など汪雲蓀の印が捺されている。

『山歌』は木版の印本であるから、当時、複数部が印刷されて世に出たはずである。ところが、三百年の時を隔てて世界に一つだけになってしまい、それが安徽の歙県にひっそり所蔵されていたのであった。『山歌』は馮夢龍の活躍した蘇州で刊行されたと考えられるので、おそらく蘇州に来ていた新安商人によって買い求められ、そのままずっと彼の地で蔵されていたのであろう。許甄夏の許という姓は新安商人の中の大姓であるから、その一族の先祖が買い求めたものであったかもしれない。

印本でありながら、世界に一つだけという状況は、例えば白話小説において、馮夢龍「三言」の原刻本が日本にだけ残ったように、時に見られることである。現地の中国において、通俗文学作品は、当時の人々にとって大切に保存する価値を認められず、読まれたはしから捨てられてしまったからであらう。それが海外や、あるいは中国でも偶然の力によって思いがけないところに残ったものである。

一九三五年に顧頡剛の校点によって『山歌』の排印本が出るのであるが、朱瑞軒の「後記」によれば、顧頡剛は校点の作業まではしたのであるが、北平に行つてしまい、校正ができなかったとある。原本と比較してみると、たしかにかなりの誤字があるようである。そもそも顧頡剛は、朱瑞軒が作った「副本（写本であらう）」を見ていたようなので、この段階での写しまちがいもあったかもしれない。

馮夢龍『山歌』については、一九五〇年代になって、再び校訂本が出されることになる。この『山歌』は一九五

九年から六二年にかけて中華書局上海編輯所が刊行した『明清民歌時調叢書』の一つとして出た。この叢書は『掛枝児』『山歌』『夾竹桃頂針千家詩山歌』『霓裳統譜』『白雪遺音』の五種からなり、線装の体裁であった。このうち『山歌』と『掛枝児』の校訂を行ったのが山東大学の関徳棟であり、これによって最初の排印本のあやまりの多くが訂正されている。この二種以外には趙景深の序が付される。この叢書は「内部発行」とされていたが、なぜか『掛枝児』以外の四種は日本にもたらされ、図書館で見ることができた。わたしが馮夢龍『山歌』の研究をはじめたにあたって、最初に見られたのは、一九三五年伝経堂の排印本と一九六二年に刊行された明清民歌時調叢書の排印本の二種であった。『掛枝児』については、後に上海の復旦大学に留学した時、ようやくそのコピーを手に入れることができた。なお、一九八六年に上海古籍出版社から『明清民歌時調叢書』全体の影印本が出され、『掛枝児』をも含む全体を見ることができるようになった。上海古籍出版社は、中華書局上海編輯所の後身である。

馮夢龍の『山歌』には、本文としての歌のほか、後評、眉批、夾批などの評語が付されている。このうち後評と眉批については、伝経堂本も明清民歌時調叢書本も収めているのであるが、伝経堂本では夾批は収められておらず、夾批は明清民歌時調叢書本で収められるようになった。しかしながら、『山歌』には伝経堂本に一葉だけ収められる本文の書影を見てもわかるように、各歌の題名の上部に「」「、」「○」「○○」「○○○」の六段階の評価を示す点と丸じるしが付され、さらに本文と後評に「」と「○」による評点が付されているのであるが、これらについては、両排印本どちらにおいても省略されてしまっていた。

わたしがはじめて北京図書館（そのときはまだ北京図書館の名称であった）に赴いて、この世界で一つしかない『山歌』原本と対面したのは、まだ上海古籍出版社による影印の『馮夢龍全集』によってその影印本が見られるようになる一九九三年よりも前、一九八五年四月のことであった。このとき北京図書館の善本部は、まだ現在の白石橋

路への移転前で、北海西側の文津街にあって、その古い建物の閲覧室で見せていただいた。善本部の係員がこの四冊からなる『山歌』原本を机の上に置いてくれた瞬間の記憶はいまでもはつきり残っている。その本の手触りも。

それはまだ上海古籍出版社から『明清民歌時調叢書』の影印本が出るか出ないかのころで、わたしは自分で作っていた原版の明清民歌時調叢書本のコピーを携えて行き、文字の対校をするとともに、自分のコピーに全体にわたって、評点を書き込んでいった。丸二日がかりの仕事であった。

中国において、印本の本文に各種の記号を用いて批評を施すことは、宋代くらいからすでに行われていたのであるが、詩歌の題目の上に「〇」「○」などによって、評者の評価を示すやり方は、明末の鍾惺・譚元春による『詩歸』で用いられたのが早い例のようである。こうした「」「○」の評価を全体を通して見てみると、評者（馮夢龍にちがいない）の評価の傾向がわかる。苦勞して書き写した甲斐があったわけである。

なお、わたしはいま、一九三五年の伝経堂の排印本をみずから所蔵している。一九八八年の春、東洋文化研究所の紀要に、はじめて『山歌』についての論文を発表し、時を同じくして広島大学に赴任することになった。そのとき伊藤漱平先生がお贈りくださったものである。封面には伊藤先生の筆字で、

昭和戊辰春、大木康君之任広島。時偶同君山哥之研究成矣。因貽本書送行。伊藤漱識

昭和戊辰（昭和六十三年 一九八八）春、大木康君、任に広島にゆく。時にたまたま同君山歌の研究成れり。因って本書をおくりて行を送る。伊藤漱識す。

とある。これはわたしの一生の宝物である。

二、本文の章

馮夢龍『山歌』に研究の的を定めたものの、ここに一つの大きな問題があった。それはすなわち、その価値とも関わっているのであるが、『山歌』が四百年近く前の蘇州方言で記されていることである。文言の文章であれば、日本には古くからの訓読の伝統があり、またいわゆる白話の文章についても、北京の言葉を基礎とした「普通話」の知識によって、ある程度は読み解くことができる。だが、文言とも白話ともまた異なつた一地方の言葉である方言については、従来研究の蓄積といえるものがほとんどなかった。

中国にあつては、普通話普及のためもあつてか、方言研究は一種のタブーになつていたようで、中国社会科学院語言研究所による方言研究の専門學術誌『方言』が刊行されたのは、ようやく一九七九年のことであつた。『山歌』を研究するには、まずその本文を読まなければならない。例えば、卷一に収める「無郎（男がいない）」の歌。

西風起了姐心悲

寒夜無郎喫介箇虧

囉裏東村頭西村頭南北両横頭二十後生閑来搭

借我伴過子寒冬還子渠

「寒夜無郎喫介箇虧」の「喫介箇虧」、「喫虧」の間に「介箇」が入っているが、「介箇」は呉語で、普通話であれば「這么箇」となる。『囉裏』も呉語で「哪裏」、「後生」は青年男子の意、「来搭」は「在那裏」で「閑在那裏」、「伴」は呉語では「躲藏」の意味になるようで、「過子寒冬」「還子渠」の「子」は普通話の「了」にあたる。かくし

ておよそ、

秋風が吹くと悲しくなる

寒い夜に男がいらないなんて、なんてひどい

どこか村の東でも村の西でも、南でも北でもどこでもいいから、二十歳の若者がぶらぶらしていたら私がその若者を借りて寒い冬の間だけ二人でしけこませてちょうだい。冬が過ぎたら帰してあげるから

といった意味になる。まずは、呉語のハードルを越えなければならない。さらに『山歌』の歌には、例えば巻三の「怨曠（独り者）」。

小阿姐児無丈夫

二十後生無家婆

好似学堂門相对子箍桶匠

一辺読字一辺箍

お嬢さんにはだんがないない

二十歳の若者には妻がないない

ちようにど学校とおけ屋のむかいあい

片や字を読み、片やたがをしめる（読字は独自、籀は孤。どちらもひとりぼっち）

この歌では、最後の句の「読字」が同音の「独自」であり、「籀」がやはり同音の「孤」である。『山歌』は文字で記された文献であるが、こうした双関語がしばしば用いられており、同音の裏の意味を明らかにしなければ、歌を理解したことにならない。

一九三五年に伝経堂の『山歌』排印本が出された時、その翌年（一九三六年 昭和十一年）、わが国の中国文学研究会の機関誌であった『中国文学月報』第十六号誌上に、武田泰淳によるその紹介が掲載された。そこで武田泰淳は、『山歌』の価値を力説しながら、巻一「次身」の一首を紹介している。

姐兒心上自有第一箇人

等得来時は次身

無子餛飩麵也好

捉渠權時点景且風雲

というのがその原文であるが、この歌は、

姐さんの心の中には、一番の思ひ人

待っていたらば、やって来たのは二番手だった

ワントンがないのなら、そばでもいいわ

おとこをつかまえ、しばしのお楽しみ

とても解釈すべきものである。ところが武田氏は、ここを「等得來時次身是点子『餛飩麵』也好」とし、本来切るべき第二句第三句をくつつけた形で載せ、「餛飩麵」をワントンと麵であつて、まじりあつてもいいじゃないかの意と解している。これは明らかに誤りである。武田氏は、『山歌』の第一の価値を呉語文学の新資料である、ということに見ておられたわけだが、やはり呉語（方言）の壁は厚かつたのである。

大学院博士課程在学の二年目、一九八四年の九月から一年間、中国政府奨学金留学生（高級進修生）として上海復旦大学に留学した。いくつかの目的を持って彼の地に赴いたが、その一つが馮夢龍『山歌』の解説であつた。伊藤漱平先生が趙景深先生に紹介状を書いてくださり、趙先生のお宅にしばしばおじゃまして貴重な資料を見せていただいたが、復旦大学においてわたしの指導教官にあたられたのが、趙先生の高足である江巨栄先生であつた（江先生は後に神戸大中文の外国人教師もつとめられた）。わたしは江先生に馮夢龍『山歌』の講読をお願いしてみた。江教授はこの厚かましい願ひにこたえてくださり、わたし一人のために、毎週毎週『山歌』の講義を続けてくださった。江先生は安徽歙県のご出身であるが（これもなにか因縁を思わせる）、先生の奥様が蘇州のご出身という幸運もあり、わからないことがあると、蘇州語ネイティブの奥様にたずねて問題を解決してくださった。また『山歌』本文の蘇州語による読みを、カセットテープに録音させていただきもした。後に著書として刊行された『馮夢龍『山歌』の研究』の中国語版が復旦大学出版社から刊行された時（二〇一七年）、江巨栄先生から序文を頂戴し、

わたしたちは暑い日も寒い日も、どんな場所でも、時には留学生宿舍で、時にはわたしの家で、そして時には調査旅行に出た時の旅館で、一句ずつ、一字ずつ読んで検討した。「奇文共に欣賞し、疑義相与に析す」であって、それを楽しんで倦むことを知らなかった。難しい箇所につかると、わたしたちは資料をさぐり、收穫があるたびに心から喜んだ。一年あまりの間に、作業をしながら学び、精力を集中して、数百首の明代蘇州山歌を基本的に完全に読み通したのであった。後になっても、わたしたちはこの時の、切するがごとく磋するがごとく、互いに教え互いに学んだ経験について、美しい思い出を留めているのである。

我們不論寒暑、不論場地、有時在留學生宿舍、有時在我的家裡、有時在外出考察的旅館飯店、我們一句句、一字字地閱讀、探討、可謂「奇文共欣賞、疑義相与析」、樂此不疲。遇上困難我們查找資料、每有收穫我們都心生歡喜。在一年多的時間裡、我們辺幹辺学、集中精力、把数百首明代蘇州山歌基本上完整地講讀了一遍。此後、我們都对這段如切如磋、互教互学的經歷留下了美好的記憶。

とお書きくださった。このお教えがわたしの『山歌』研究の基礎になっている。江先生とめぐり会い、お教えを受けることがなかったならば、わたしの『山歌』研究は、そもそも不可能だったであろう。江先生にはどれだけお礼を申し上げて申し足りない。江先生は、復旦大学を退休された後も、続々と著作を世に問われておられる。ちょうどこの原稿を書いている二〇二四年の七月、上海で久しぶりに江先生をおたずねすることができた。コロナ禍を越え、元気にお過ごしの方先生にお目にかかり、この三月末、無事に東京大学の定年退職を迎えられたことをご報告し、これまでのご指導に対し御礼を申し上げることができた。江先生のご健康ご長寿を心からお祈りする次第である。留学中、またその後の訪中の際には、江教授のほかにも、復旦大学黄霖教授、上海師範大学孫遜教授、孫菊園

教授、蘇州大学（当時）石汝傑教授をはじめとして、さまざまな機会に多くの方々からお教えをいただいている。

留学から戻った翌年、一九八六年の四月、東大東洋文化研究所の助手に採用された。助手になって、復旦大学留学中、江先生に通読していただいた『山歌』に関する論文の執筆に専念し、一九八八年三月、『東洋文化研究所紀要』第一〇五冊に、一八〇ページを越える長編の論文「馮夢龍『山歌』の研究」をまとめることができた。当時、東文研の紀要には、枚数制限がなかったのも、ありがたいことであった。

東洋文化研究所の助手として二年間在職し、その後広島大学文学部の中国文学研究室に赴任することとなり、広島大学に三年間奉職して、一九九一年四月、母校である東京大学文学部中国語中国文学研究室に戻った。このころから田仲一成教授のお勧めによって、学位論文の作成にとりかかることになった。テーマはもちろん馮夢龍『山歌』である。論文の構想としては、東文研の紀要に発表させていただいた論文をもとにした論考編に加えて、馮夢龍『山歌』三八〇首の日本語訳と注釈による訳注編を付すことにした。

幸いなことに、文学部在職中の一九九三年、若手教員の在外研究の機会を得て、中国上海に三ヶ月、アメリカ、ハーバード大学に三ヶ月滞在することができた。上海では、再び江巨栄先生をおたずねして、『山歌』所収歌の訳注作業に専念した。一九九三年の段階では、閔家驥・范曉・朱川・張嵩岳編『簡明吳方言詞典』（上海辞書出版社 一九八六年）のような呉語の辞書、また馮夢龍『山歌』について、石汝傑・陳榴競『山歌索引』（好文出版 一九八九年）が作られ、張惠英氏の『山歌』注¹が、一九九二年から『開篇』誌上に掲載されるようになっており、これらを参照することも可能になっていた。『山歌』については、すでに早く一九七三年に、Cornelia Töpelmann 女史による *Shan-ko von Feng Meng-lung: Eine Volksliedersammlung aus der Ming-Zeit* [Münchener Ostasiatische Studien Band 9] Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GMBH のドイツ語全訳が刊行されていた。先行の研究としてドイツ語訳

も参照する必要がある、ドイツ語読解について、田仲一成先生にたいへんお世話になった。

馮夢龍『山歌』は十卷からなり、

卷一―卷四 私情四句（四句山歌）

卷五 雜歌四句（四句山歌）

卷六 詠物四句（四句山歌）

卷七 私情雜体（中篇山歌）

卷八 私情長歌（長篇山歌）

卷九 雜詠長歌（長篇山歌）

卷十 桐城時興歌

という構成である。なかでも、卷六と卷七に収められる詠物歌は、具体的な物に即して歌われている歌で、物の形や性質がわからなければ、理解できない。例えば卷七に「鋸子（のこぎり）」を詠じた歌がある。

結識私情好像鋸子能

来来往往忒慇懃

兩人把手

線路上行

伶牙俐齒

背後絆縄（下略）

恋をするは鋸のよう

行ったり来たりまめなこと

二人で手に持ち（手に手をとって）

線の上を行く

鋭い刃があり（言葉たくみで）

うしろはひもでしばられている（下略）

結びはかなりエロチックな歌詞なので、ここでは省略するが、問題は「背後絆縄（うしろはひもでしばられている）」の句である。こうしたモノの理解には、明代の『三才図会』が大いに役に立った。その器用卷十一に、のこぎりの図が見えるが、中国の伝統的な「のこぎり」は、H字型の木枠の下側に金属の歯があり、上部をひもでしばって締めている（図）。日本や西欧の「のこぎり」を考えていたのでは、「背後絆縄」はわからない。九十三年の上海滞在時、同じ形の「のこぎり」が使われているのを見つけ、写真を撮らせていただいた（写真）。この例などは、あるいは中国の方にとっては自明のことで、わざわざ注釈は必要ないのかもしれない。だが、外国人のわれわれには、どうしても注釈

鋸



三才図会 ノコギリ

が必要なのである。平素は道を歩いていてもブーツとしているのであるが、訳注作業をやっていると、目に入るありとあらゆるものに注意が向けられる。『山歌』は一つの宇宙であって、こうした問題を一つ一つ解決していくのは、苦しくもあったが、楽しみであった。船が出てくれば、『中国古船図譜』などといった本を買ってきて調べたし、将棋が出れば『中国象棋詞典』、コオロギが出れば『蟋蟀譜集成』などを買い込んで調べた。

『山歌』という当時の人々の生活百科のような書物を理解するためには、当時の世界全体の理解が必要なのであった。そしてまた『山歌』の訳注は、明代の人々の生活文化を知るための一つの窓口になりうるのではないかとも思う。かくして、一九九八年に学位をいただいた博士論文では、『山歌』本文の全訳注を付すことができ、博士論文にもとづいて二〇〇三年に勁草書房から刊行された『馮夢龍『山歌』の研究 中国明代の通俗歌謡』においても、全訳注を収めることができた。もちろん、本になった後にも、新たな発見があったし、また誤りも多々みつけていて、これからまた修訂の仕事をしなければならない。本の形になった『馮夢龍『山歌』の研究 中国明代の通俗歌謡』については、『中国文学報』第六十六冊（二〇〇三年）に、伊藤徳子さんが書評を書いてくださった。

『馮夢龍『山歌』の研究 中国明代の通俗歌謡』が刊行された同じ年の夏八月、シンガポールで開催されたICAS (International Convention of Asia Scholars) に参加した。その折、シンガポール国立大学の李焯然先生の紹介で、当時イタリアのナポリ東洋語学校の教授（その後ローマ・サピエンツァ大学教授）であった Paolo Santangelo 先生



中国 ノコギリ

にお目にかかった。Santangelo 先生は、中国明清における感情史の研究に従っておられ、李焯然先生との共編でオランダの Brill から *Emotions and States of Mind in East Asia* の叢書を刊行しておられ、その一つに『山歌』の英語訳注を加えたいとお申し出を受けた。当時大学院生だった田中智行さん（後に徳島大学准教授を経て、現在大阪大学准教授）に英語の下訳作成の協力を得、それにもとづきながら、Santangelo 先生とともに訳注の検討作業がはじまった。時には東京で、時にはローマで、時にはわたしが長期滞在中だった台北で、だいたい数日間にわたって、朝から晩まで英語での検討作業を行った。紙幅の都合で、巻八以下の長篇歌と巻十の桐城時興歌の訳注はあきらめざるを得なかったが、かくして『山歌』巻一から巻七までの英語による訳注、Oki Yasushi & Paolo Santangelo, *Shan'ge, the 'Mountain Songs' Love Songs in Ming China*, Leiden・Boston: Brill, 2011 が刊行された。同シリーズには、Pi-ching Hsu (徐碧卿) 教授による馮夢龍『笑府』の英訳 *Feng Menglong's Treasury of Laughs, A Seventeenth-Century Anthology of Traditional Chinese Humour* も含まれている。

三、歌の章

『山歌』は一つの文献資料であるが、これはもともと民間で歌われていた歌の歌詞を記録したものである。歌にはそもそも歌われた場がある。歌が歌われた場についての考察は、わたしの馮夢龍『山歌』研究の重要な部分の一つで、研究の論考篇では、『山歌』所収歌を、その来歴によって農村の歌、都市の歌、船の歌、妓楼の歌、文人の戯作に整理し、歌が歌われた状況を説明しようと試みた。馮夢龍『山歌』には、これらさまざまな来歴の歌が含まれているというわけである。この作業には、文献の上では、溝口雄三先生のご紹介で、東洋文庫で山根幸夫先生が主宰されていた明代史研究会に加えていただき、歴史学の知識を聞きかじることができたことが大いに役に立ってい

る。研究会を通して、地方志を十分に利用することを身につけていただいた。蘇州郊外盛沢鎮の歴代の地方志に山歌会の記録があることを知り、清の仲孫樊の長詩「山歌行」を見つけたのも、このおかげであった。

そもそも歌は歌であって、メロディーがあって歌われるものである。明代の蘇州に行くことは不可能であるが、何とか蘇州の山歌を自分の耳で聴けないものか。わたしが奉職した東洋文化研究所の先生方は、多くがフィールドワーカーで、とにかく現地へ行くことが、研究所の一種不文律になっていた。そこで、文献研究に加えて、尾上兼英先生、田仲一成先生が従っておられた現地研究のまねごとを試みさせていただくことにした。

現地調査といえば、復旦大学留学中の一九八五年、蘭州大学の柯楊先生をおたずねしたところ、ほどなく蘭州郊外の蓮花山で花児会「花児」は当地の民謡が開催され、あわせて甘肅花児学術討論会が開催されるので、参加しないかとお誘いいただいた。二つ返事で参加したいとお答えし、この会に参加することができた。蓮花山の花児会は、毎年この機会に多くの人が集まり、花児の歌を歌い交わす。男女の対唱をはじめとする多くの歌を実際に聴くことができたのは、得がたい経験であった（この花児会については、一九八五年の『東方』第五十七号に「甘肅花児学術討論会に参加して―生きていた歌垣と宝巻」の小文を書かせていただいた）。馮夢龍『山歌』の中にも、男女の対唱と見られる歌があることに気づいたのも、この時の経験にもとづく。このとき海外から学術討論会に参加されていたのが、ハーバード大学の音楽学の趙如蘭教授と現在神奈川大学教授でヤオ族文化の研究に従っておられる廣田律子女士であった。十年近く後、ハーバードに滞在した時、趙先生にもたいへんお世話になった。人の縁は不思議なものである。

助手の時代、歌が実際どのように歌われたのか、その手がかりをさぐるべく、留学中からお世話になってきた上海社会科学院文学研究所の姜彬先生（呉歌の専門家）のご紹介により、上海の青浦県、無錫県、南通市などの地で、

実際に歌を聴かせていただくことができた。農作業の時、音頭取りのリードのもと、みんなで歌う山歌や、馮夢龍『山歌』にも通じるような、多少きわどい内容の歌なども聴かせていただいた。音楽そのものの研究者ではないので、音楽的には、この調査をどこまで生かしたか、ここらもとないのだが、実際に歌を聴いた実感は、論文の背後で生きていると思う。

ちょうどわたしと同じころ、南京大学に留学し、実際に江蘇各地をめぐって、民間歌謡調査をおこなっていたのが、オランダの Antoinet Schimmelpenninck 女史（ライデンにおける Wit Idema 先生の学生）であった。彼女は、その調査の結果を一九九七年 *Chinese Folk Songs and Folk Singers — Shan'ge Tradition in Southern Jiangsu* (CHIME Foundation, Leiden)（『中国の民謡と歌い手たち——江蘇南部における「山歌」の伝統』）として発表された。この本には、採集された歌の音源を収めたCD、また歌詞も付されている。この本について、詳しくは拙稿「新刊紹介 書評 アントワネット・シンメルペンニク 中国の民謡と歌い手たち 江蘇南部における「山歌」の伝統」（『東京大学 中国語中国文学研究室紀要』第二号 一九九九）があるので、ご覧いただければと思うが、驚くべきことに、例えば、本書第一二九番の歌「結識私情姐妹倆」、

結識私情姑嫂倆

問你情郎兩朵鮮花哪朵香

姑娘是出水荷花白又嫩

嫂嫂是蓮心結籽骨氣硬

結識私情娘媛倆

問你情郎兩朵鮮花哪朵香

清水里紅菱嫩箇甜

沙角菱咬咬老來香

小姑と兄嫁の二人と關係ができた

ねえ、あなた、二つの花、どちらがいい香り？

小姑は水から出た蓮の花、白くてやわらか

兄嫁は硬い蓮の実、度胸がある

母親と娘の二人と關係ができた

ねえ、あなた、二つの花、どちらがいい香り？

清水の中の赤い菱はやわらかくて甘い

でも菱の実を咬んでみると古いやつほどよい香り

は、馮夢龍『山歌』卷四の「姑嫂」、

姑嫂兩箇並肩行

両朵鮮花囉裏箇強

姑道露水裏採花還是含藥兒好

嫂道池裏荷花開箇香

兄嫁と小姑が並んで行く

二輪の花はどちらがすてき？

小姑は、露の中で花を採ればやはりつぼみがよいといい

兄嫁は、池の蓮の花は開いた方がよい香りという

及び同じく巻四の「娘児」、

娘児両箇並肩行

両朵鮮花囉裏箇強

因道池裏藕兒嫩箇好

娘道沙角菱兒老箇香

母親と娘が並んで行く

二輪の花はどちらがすてき？

娘は、池の蓮もやわらかいのがよいといい

母親は、夢の実は古いのがよい香りという

のヴァリエーションと見ることができ。多少の文字を変えながら、馮夢龍『山歌』に見えるこれらの歌が、一九八八年十月十七日に呉県勝浦前戴村の金文胤老によって歌われたものであることがはっきりわかり、この歌が長い生命を維持してきたことが確認できる。歌についての文献研究と音楽研究をどう結びつけるかは、いまだ残された一つの大きな宿題である。シンメルベニंक女史は、惜しいことに、二〇一二年に世を去られた。

この時のわたしの歌謡調査には、さらに副産物もあった。南通での調査にあたり、南通で歌われていた長編山歌「紅娘子」があることを知った。農民の娘であつた紅娘子が、悪者の地主によって恋人を殺され、一人北京にのぼつて皇帝に直訴しようとするが、やがて李自成の軍に身を投ずるといふ物語を持つ長編山歌である。これについて論文「中国民間の語り物『紅娘子』について」（『伝承文学研究』第三十七号 一九八九年）を書いたのであるが、この紅娘子というのは、明末の李自成の軍のブレインであつた李岩の妻などとして、当時の歴史資料にも見られる人物である。明代史研究の佐藤文俊先生が、『李公子の謎 明の終末から現在まで』（汲古書院 二〇一〇年）で、この李公子及び紅娘子伝説について、清初から現代（例えば郭沫若）に至る数多くの資料を紹介されている。

四、序文の章

これまでも文学史の中で馮夢龍『山歌』に言及されていたのは、多くがその序文「叙山歌」についてであつて、尾上兼英先生もそれに触れて、『山歌』の重要さを説かれたのであつた。

『山歌』の序文、「叙山歌」は、その末尾に「墨憨齋主人題」と記されている。墨憨齋は、馮夢龍のいわば公開の齋号であるから、実名で発表したものといつてよい。馮夢龍の名を今日最も高めている短篇白話小説集「三言」には、どこを見ても、その実名にあたるものは出てこない。後に「三言」の後を承けての凌濛初「二拍」や「三言二拍」からの選本である『今古奇觀』の序文の中で、「三言」が馮夢龍によるものと触れられているだけである。その意味でも、「叙山歌」は、まちがいになく馮夢龍の声を直接聞きうる資料なのである。

「叙山歌」については、馮夢龍『山歌』について最初に『東洋文化研究所紀要』第一〇五冊（一九八八年）に発表した「馮夢龍『山歌』の研究」の中では、さりとしか触れられなかったが、後に特に「叙山歌」を取り上げた「馮夢龍『叙山歌』考——詩経字と民間歌謡——」（『東洋文化』第七十一号 一九九〇年）でより詳しく検討した。この序文をいま改めて読み直してみても、それが持つ射程の長さには、驚きを禁じ得ない。

「叙山歌」は、まず古代の『詩経』が宮廷の歌である「雅」と民間の歌である「風」の両者を持つことを評価する。ところが今や、「雅」の後裔たる詩が高く評価されるばかりで、「風」の後裔は山歌などと称され、重んじられることがない。しかし、かえりみれば、詩三百篇は孔子がみずから選んだものであつて、淫奔の歌とされる鄭風衛風の歌にしても、それは孔子みずから選んだもの。孔子は、民間の男女の恋情が「真」であるから、これらを『詩経』のうちに選んだのである。ここまでの部分の叙述でも、明代に至るまでの多くの『詩経』の評価研究史を背景にしている。例えば、古詩三千の中から詩三百篇を選んだのは孔子だという孔子刪詩説は司馬遷の『史記』『孔子世家』に見える見解であるし、「風」が民間の歌謡であると言い切ったのは、朱子なのであつた。例えば『朱子語類』卷八十 詩一 綱領の「風は多く在下の人に於て、雅は乃ち士夫の作る所なり」など。

それに続けて「叙山歌」は、「雅」の後裔たるいまの「詩壇の詩」は、詩としての感動を失った「仮詩文」だとい

う。しかし、山歌には「仮山歌」がないのであるから、これによって「真」を存することができらるだろう。かくして三八〇首にも及ぶ山歌集を編むのだというのである。

この「真」の考えの背後には、李卓吾の「童心説」や、袁宏道の「無聞無識の真人」（「叙小修詩」）、さらにはより古く李夢陽の「真詩は乃ち民間に在り」（「詩集自序」といった、いわゆる「真詩」の思想の系譜がある。それは、いまや「真」が知識人の側ではなく、庶民の間に存しているだとする、階級階層の違いを背景として、知識人の自己否定をともしなうものであった。そのことは、またいわゆる陽明学の「満街みな聖人」といった考えにもつながるものである。こうした明末の「真詩」について教えられたのは、入矢義高先生の「真詩」という論文（『吉川博士退休記念中国文学論集』一九六八年）によってである。基本的な考え方の枠組みについていえば、ずっとこの入矢論文の掌上にあるといってもよい。

はじめに触れたように明末は通俗文学の時代であるが、小説や戯曲、歌謡などの隆盛の背後には、知識人の側のこうした考え方があったのであろう。「叙山歌」は、当時の知識人が、もともと庶民のものである民間歌謡に何を見、何を期待していたのかをさぐるための格好の資料であったことになる。

最近考えているのは、この「真」の思想が、日本の江戸時代にも影を落としており、直接の影響とはいえないかもしれないが、少なくとも共通点が見られるという点である。江戸時代といえば漢学が主流であった時代である。ところが、漢学ではなく、むしろ漢学を排除しようとした国学の思想に、これとよく似た思想を見ることができるようなのである。賀茂真淵の『万葉集大考』に、

いひしへの世の歌は、人の真ごゝろ也、後のよのうたは人のしわざ也。

といい、本居宣長の『玉勝間』巻一で、いわゆる「漢意」を批判し、

からぶみにいへるおもむきは、皆かの国人のこちたきさかしら心もて、いつはりかざりたる事のみ多ければ、真心にあらず。

同じく『初山踏』における、

古の道の意の明らかならず、人みな大きにこれを誤りしたためたるはいかなるゆゑぞと尋ねれば、みな此漢意に心のまどはされ居て、それに妨げらるるが故也。これ、千有余年、世中の人の心の底に染み着きてある痼疾なれば、とにかくに清くはのぞこりがたき物にて、(中略)かくのごとくなる故に、道をしるの要、まづこれを清くのぞき去るにありとはいふ也。これを清くのぞきさらでは、道は得がたかるべし。

このような発言、宣長は「かの国人のこちたきさかしら心もて、いつはりかざりたる事のみ多」い「漢意」を排除した、「漢意」にけがされる以前の「真心(大和心、和魂)」を主張する。この宣長のいうところの「真心」は、李卓吾の「童心」や、袁宏道の「無聞無識の真人」、馮夢龍の「男女の真情」などに置き換えてもそのまま通ずるところがあるようである。また宣長は『石上私淑言』巻二において、

まづもろこしの詩も。かの詩経のころのはなを上ツ代のすなをなりし心ばへの残りて。あはれになつかしきふしおほかるを。さればかの詩経の詩と後の世のとをくらべみるに。其心ばへさらに同じ物にはあらず。

といって、『詩経』の詩を「上ツ代のすなをなりし心ばへの残りて」と、その真率さ純粹さを評価している。さらに同じく『石上私淑言』巻二において、

唐のやうにさかしらをのみ常にいひありく国の人も。詩にはいつはらぬ心のまことをいひいづればこそ。いみじき物にして孔子も六経の一ツには備へ給へれ。然るを後の世の詩は。その本の意をばわすれはてて。ただよろづにかどかどしくかしこからんとのみするほどに。かざるまじき性情をさへいたくつくろひかざりて。むべむべしう見せたる物なれば。まことの人情の有さまにはあらず。みないつはれるうはべの情なれば。いかにめでたくうるはしとてもなにかはせむ。いと心づきなくうるさきわざにこそあめれ。

といって、古代の『詩経』（ここでは、主に国風を意識しているであろう）を、「いつはらぬ心のまことをいひいづ」るものであったために孔子も「六経」の一つに加えたのであるが、後の世の詩は「みないつはれるうはべの情」になつてしまった、と馮夢龍「叙山歌」とよく似たことを述べているのである。

馮夢龍は、庶民の文化の価値を評価するところから、通俗的な言語である白話、さらには山歌のような蘇州方言、方言の世界に分け入っていった。『山歌』巻一「看」の後評に見える、

「生」「声」「争」の字はともに、俗の言い方では江陽の韻に叶う。こうした類はあまりに多すぎて、いちいち記すことはできない。呉人が呉歌を歌うのは、たとえて言えば瓦投げ銭投げ（子供の遊び）のようなものであって、一地方の遊びである。だから天子様の発布する文章法令のように、天下にあまねく行なわれる必要はないのである。

凡生字、声字、争字、俱從俗談叶入江陽韻、此類甚多、不能備載。呉人歌呉、譬諸打瓦拋銭、一方之戲、正不必如欽降文規、須行天下也。

は、蘇州の歌謡の韻には、例えば『中原音韻』のような標準的な韻と合わないものがあるが、そもそも皇帝が発する文書とはちがうのであるから、合わなくてもかまわないのだ、と方言文学の価値を、消極的ながらひらきなおった形で述べた宣言ということができないわけではない。

馮夢龍は民間のものに「真」を見、その「真」を表現した媒体として方言の歌謡を集めて『山歌』を作った。これは、方言という新しい言語の価値の発見であった。一方で本居宣長の『玉勝間』巻二に見える有名な賀茂真淵のことば。

われももとより、神の御典をとかむと思ふ心ざしあるを、そはまづからごゝろを清くはなれて、古へのまことの意をたづねえずはあるべからず。然るにそのいにしへのこゝろをえむことは、古言を得たるうへならではあらず。

宣長は、この賀茂真淵の教えに従い、古代人の真心、大和心をつかむためには、「古言」すなわち日本の古代の言語を学ばなければならないとして、古代の言語の研究に分け入っていった。ここには、やはり古代の言語の新しい価値の発見があるのであって、両者の構造はよく似ているといえるのではないだろうか。

本居宣長は、若いころ京都で堀景山のもとで漢学を学んでおり、『玉勝間』巻十において、明代古文辞派の何景明の「性情の切なるは夫婦の間にしかず」の一節を原文のまま引いたりもする。宣長が「童心」や「真詩」をめぐる明文藝思潮を知って、それを学んだという直接の関係ではないかもしれない。ただ、両者の主張には、時と所を越えて共通する点を見いだすことができる。「叙山歌」から発する問題は、日本にまで及んでいるのである。

結び

これまでずっと馮夢龍という人物、またその『山歌』とつきあってきた。右に述べたように、『山歌』一つを取っても、そこからさまざまな問題が派生し、それを追究することを楽しみとしてきたわけである。『中国遊里空間 明清秦淮妓女の世界』（青土社 二〇〇一年）や『蘇州花街散步 山塘街の物語』（汲古書院 二〇一七年）などの妓女や妓楼の研究も、『山歌』や『掛枝兒』に妓楼の歌が含まれていることが、出発点の一つになっている。馮夢龍、そして『山歌』は、なかなか深みがある研究対象であったと思う。

馮夢龍研究の先達のお一人に、『笑府』の全訳をされた松枝茂夫先生がおられる。松枝先生には、ご本を通じてはたいへんお世話になっていたのだが、一九九二年に東京学藝大学で開催された日本中国学会の大会の懇親会で、一度だけお目にかかってご挨拶申し上げたことがある。松枝先生は、とても寡黙な方でおられたのだが、山歌の研究をしていますと申し上げると、「山歌かあ、いいなあ、山歌、いいなあ」と感慨深げにおっしゃられたのを、はっき

り覚えている。

倉石武四郎先生の編になる平凡社中国古典文学大系『宋代詞集』（一九七〇年）の倉石先生の「あとがき」に、次のような一節がある。

最後の民歌は、まだ学界でもその研究がすすんでいないため、一時は放棄するほかはないとまで考えましたが、「近代歌謡集」などと歌ったてまえ、いまさらひっこみもつかず、さいわい鄭振鐸先生の『中国俗文学史』に「明代的民歌」という章があつて、おもしろい歌があげてありますので、その中の短くてわかりやすいのを若干須田先生に訳していただき、わたくしがある程度、筆を入れました。実は鄭振鐸先生がその短い歌のあとに、主として馮夢龍の『山歌』から採られた蘇州語の長篇民歌がならんでおり、とてもおもしろいので、できたら、その中から、たとい一首なりと訳しておきたいとおもい、その方面の手くばりもしてみたのですが、今のところ、まだそれを訳しおおせる自信がなく、ついにあきらめました。

もちろんとりわけ長篇歌については、わたしの訳注にも自信はなく、わからないところだらけである。これからの若いみなさんには、わたしの拙い訳注や研究を越えて、さらにその先へいつていただきたいと切に願う次第である。

（おおきやすし・東京大学名誉教授）